

言語文化と 言語教育

— 文章読本を考える —

2021年
12月25日〔土〕
13:30～15:30 (受付開始13:00)
武庫川女子大学中央キャンパス
I-103 (研究所棟1階)裏面地図参照

講師 **渡邊 隆信** (神戸大学国際人間科学部教授、言語文化研究所研究員)

及川平治における動的教育論と綴り方教育

明治期終盤にそれまでの教師中心・教材中心の学校教育を批判し乗り越えようとする動きが広まる。そうした教育改革の思潮は一般に「新教育」と呼ばれる。それは「児童中心主義」をスローガンとし、当初は私立学校や師範学校附属学校で試行され、大正期に徐々に一般の公立学校に広まっていった。

関西における新教育のメッカの一つは、兵庫県明石女子師範学校附属小学校であった。同校の新教育を主導したのは、1907(明治40)年から約30年間主事を務めた及川平治である。彼は「動的教育論」を提唱し全国に発信していった。動的教育論は様々な教科に適用される教育原理であったが、国語科の綴り方教育にも影響を及ぼした。本発表では、及川の動的教育論の特質を整理したうえで、動的教育論提唱前の著作『新教育学』(1903年)と提唱後の著作『分団式動的各科教育法』(1915年)の比較分析等を通して、綴り方教育の変化についてお話ししたい。

講師 **玉井 暲** (武庫川女子大学文学部教授、言語文化研究所研究員)

『文章読本』の系譜

文章読本といえば、谷崎潤一郎の『文章読本』をもってその嚆矢とするのが伝統的な見方である。谷崎の後には、川端康成、三島由紀夫、丸谷オーらの『文章読本』が陸続と現れる。文章読本は本来一般の人びとが望ましい文章を書くための指南書でありながら、これらの小説家の『文章読本』は、文章を書くのを専門としている職業作家によるものである。どこか自分の文章を自己正当化する面がうかがえるのは否めないであろう。その一方で、作家の小説や作品を味わう読者や一般市民として文章を綴らねばならない側からの『文章読本』も多数書かれている。たとえば向井敏『文章読本』や斎藤美奈子『文章読本さん江』などがその代表であろう。

こうした日本における『文章読本』の系譜を視野にいれて見てみると、『文章読本』は、われわれが実際に文章を書いたり鑑賞したりする営みや、あるいは国語の学習や日本語教育を行ったり受けたりする場において、どのような関りをもっていたのだろうか、という関心が生じてくる。『文章読本』が、一般の人びとが今日さまざまな文章に接する日常生活において果たしている意味について考えてみたい。

司会:

影山 尚之 (言語文化研究所長)

コメンテーター:

山崎 洋子 (武庫川女子大学客員教授、言語文化研究所研究員)

岸本 千秋 (言語文化研究所助教、言語文化研究所研究員)

参加無料

申込締切

12月21日〔火〕



申込方法

QRコード・メール・ファクス・ハガキのいずれか

- 今後、緊急事態宣言が発出された場合は開催を中止します。
- 学内に駐車場はありません。近隣のコインパーキングをご利用ください。

主催: 武庫川女子大学 言語文化研究所

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46 阪神鳴尾駅下車 徒歩7分

FAX: 0798(45)3574 TEL: 0798(45)3536

メール: ilc@mukogawa-u.ac.jp

武庫川女子大学

言語文化研究所フォーラム

会場のご案内

